

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和6年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第3号（6月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海等への汚染防止)
(養蚕，養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

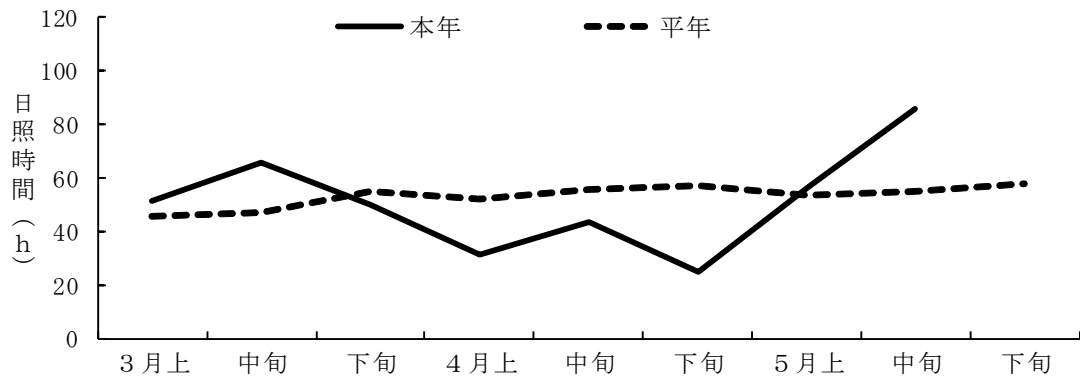
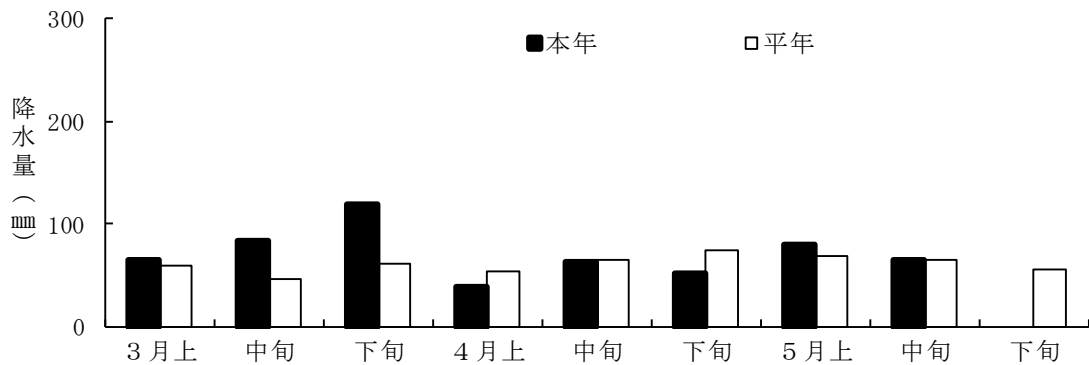
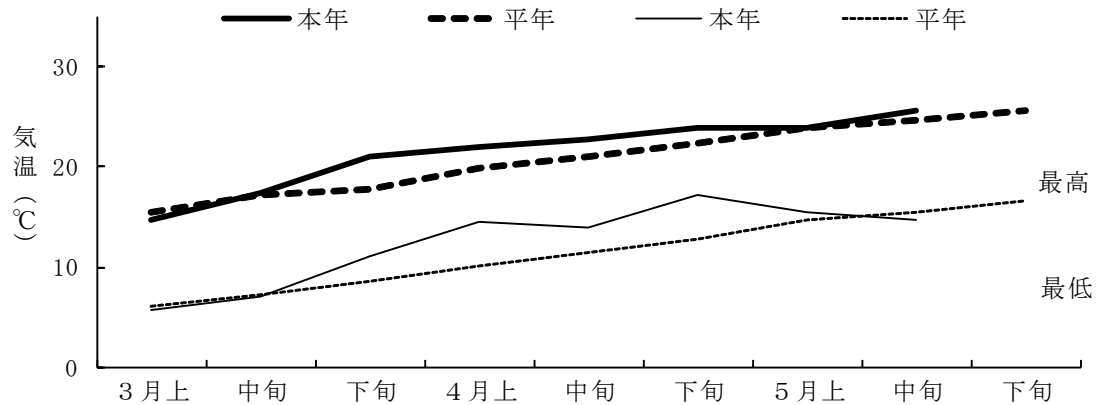
令和6年度 病虫害発生予報 第3号

令和6年5月29日
鹿児島県病虫害防除所

I. 向こう1か月の予報（5月25日から6月24日） 令和6年5月23日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	30	30	40	気温は、九州南部がほぼ平年並、奄美地方が平年並か高い。降水量は両地方とも平年並か多く、日照時間も両地方ともほぼ平年並。
	奄美地方	20	40	40	
降水量	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	20	40	40	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	30	30	

II. 3～5月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	早期水稲	いもち病	並	並
		紋枯病	並	並
		セジロウンカ	多	多
野菜	イチゴ（苗床）	ハダニ類（県本土）	やや多	やや多
花き	キク（施設）	白さび病（県本土）	並	並
		ハダニ類（県本土）	やや多	やや多
		アザミウマ類（県本土）	やや多	やや多
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	並	並
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	少	少
〃（奄美地域）	並	並		
茶樹	チャ	炭疽病	やや多	多
		輪斑病	やや多	多
		チャノコカクモンハマキ	多	多
		チャハマキ	やや多	やや多
		チャノホソガ	並	やや多
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) いもち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 0% (平年 3%)

：並

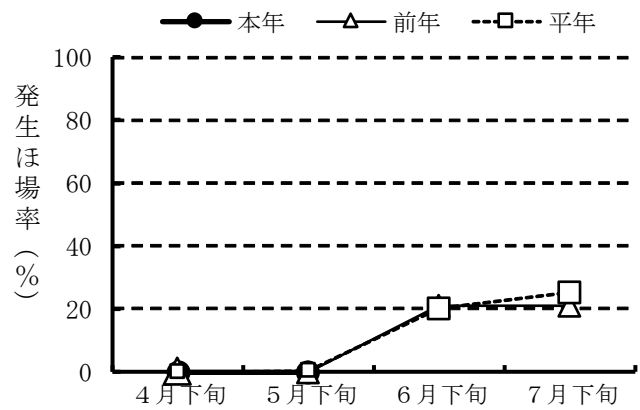
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 葉いもちの発生が穂いもちの発生につながりやすいので、早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。

(イ) 出穂期が梅雨期間にあたるので、常発地では粒剤による予防散布が効果的である。

(ウ) 穂いもち防除は穂ばらみ後期に行うが、時期を失しないよう注意する。

(エ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。



いもち病の発生ほ場率 (早期水稲)

(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

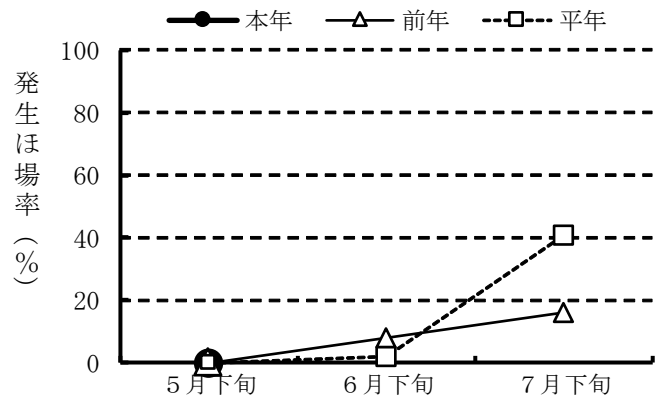
(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 0% (平年 0%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除は上位葉鞘への進展期にあたる出穂1週間前から出穂期頃に行う。

(イ) 窒素質肥料の多用は発生を助長するので、各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

(ウ) 過繁茂状態の水田や前年に多発した水田では、発生が認められたら病勢の進展に注意する。



紋枯病の発生ほ場率 (早期水稲)

(3) セジロウンカ (令和5年度技術情報第10号:令和6年5月22日付け参照)



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量: 多

発生ほ場率 42% (平年5%)

: 高い

60W水田予察灯での4月1日~4月25

日の誘殺虫数3頭(平年0頭): やや多

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除適期は4月1日の飛来に由来する第2世代幼虫が6月7~12日, 4月7日の飛来に由来する第2世代幼虫が6月11~17日と予想される(図)。

(イ) セジロウンカの発生は地域やほ場により異なることから, ほ場全体を見回り発生を確認する。特に箱処理剤を使用していないほ場では, 定着して増殖する可能性が高い。

(ウ) セジロウンカの生息している株元をよく観察する。また, 吸汁・産卵による葉鞘褐変症状の発生が多いと生育を阻害する。

(エ) 飼料用イネ品種は抵抗性が弱く, 一般には起こらない坪枯れの被害が出る場合がある。

(オ) 本田で防除する場合は, 農薬が株元に十分届くよう散布する。

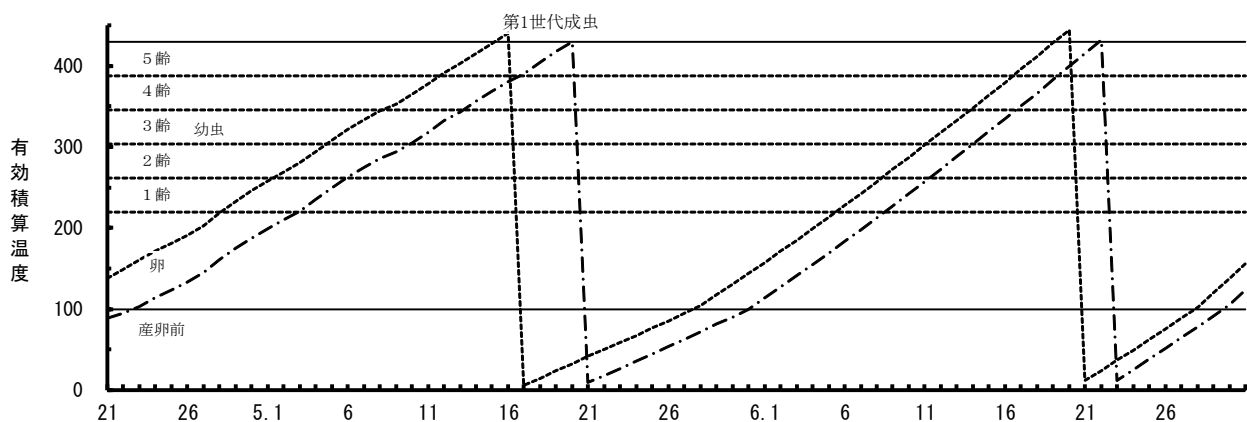
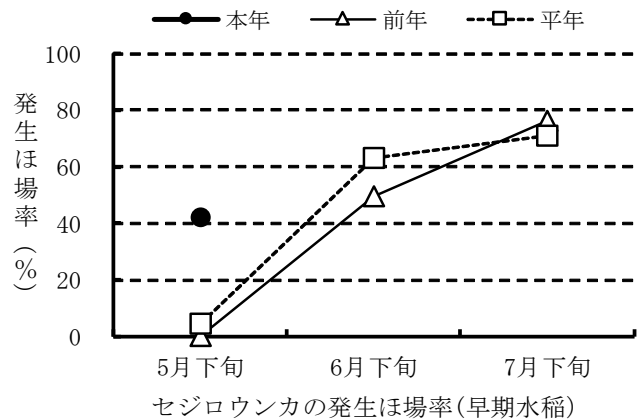


図 セジロウンカの有効積算温度による発生経過予測図(参考)

注) 気温は, アメダスポイントデータ(加世田)のR6年4/1~5/21の平均気温, それ以降は平年値を利用

(4) 海外飛来性害虫の飛来状況

ア セジロウンカの初誘殺日

(ア) 予察灯 5月27日現在, 誘殺あり4月1日(平年:5月19日)

(イ) 大型吸引トラップ 5月27日現在, 誘殺あり4月30日(平年:5月25日)

イ コブノメイガの初誘殺日(フェロモントラップによる調査は, H30年から開始)

(ア) フェロモントラップ 5月27日(R元:5/29, R2:5/20, R3:5/18, R4:5/7, R5:5/22)

ウ 予察灯等への海外飛来性害虫の誘殺状況は, 病害虫防除所のホームページで確認するとともに, 本田の見廻りを行い発生に注意する。

表1 予察灯(60W白熱電灯)でのウンカ類の誘殺状況(農業開発総合センター内:(水田))

月/日	4/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
センロウカ	3*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トビイロウカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
センロウカ	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0				
トビイロウカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				

注) 調査開始日: 4月1日

*4/1, 4/7, 4/9 各1頭誘殺

表2 大型吸引トラップでのウンカ類の誘殺状況(農業開発総合センター内)

月/日	4/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
センロウカ	1*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
トビイロウカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
センロウカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
トビイロウカ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				

注) 調査開始日: 4月1日

*4/30 1頭誘殺

表3 フェロモントラップでのコブノメイガの誘殺状況(農業開発総合センター内:(水田))

月/日	5/1~5/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
コブノメイガ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
コブノメイガ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1			

注) 調査開始日: 5月1日

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

（1）ハダニ類

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 やや多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率57%（平年36%）

：やや高い（+）

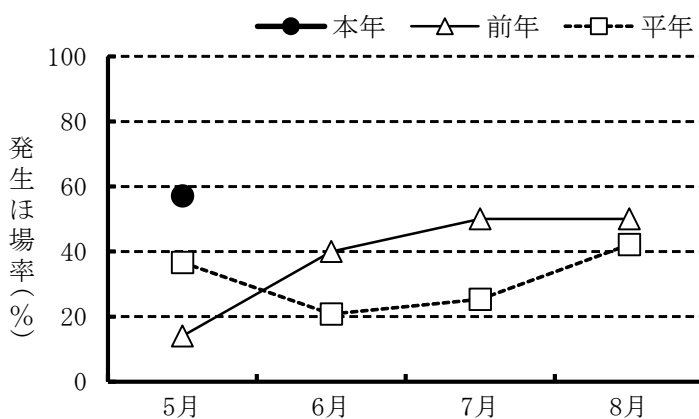
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

（イ）薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

（ウ）薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。

（エ）同一系統薬剤（RACコード参照）の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



ハダニ類の発生ほ場率（イチゴ苗床）

* 平年値は令和元年からの5年間の平均

防除に関する今月の留意事項

1. バレイシヨの収穫後の耕種的病害対策（令和5年度技術情報第17号：12月26日付け、第19号：2月1日付け参照）

収穫残さは次作での疫病、菌核病、軟腐病及びそうか病等の一次伝染源になるので、収穫後は以下のほ場管理を適切に行う。

（1）収穫後の発病茎葉やいも、くずいも等は、ほ場及び畦畔外に持ち出し、適切に処分する。

（2）疫病、菌核病の発生が多く、残さの持ち出しが困難なほ場では、天地返しにより残さを土中深く埋没する。

（3）イネ科牧草等の作付けによる輪作に努める。



令和5年度技術情報第17号
（バレイシヨの疫病）



令和5年度技術情報第19号
（バレイシヨの菌核病）

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率10%（平年6%）：並

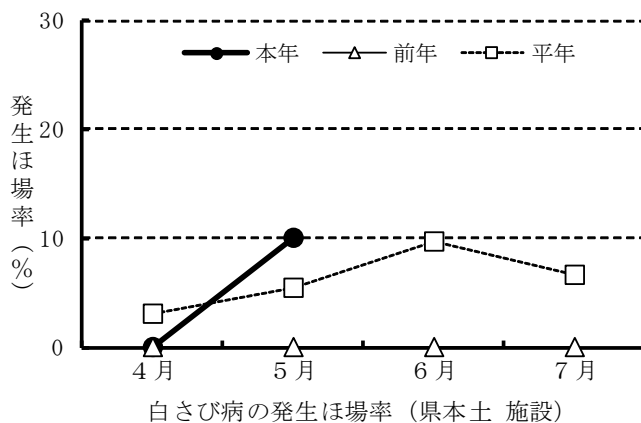
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し、適正に処分する。

(イ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(ウ) 母株からの持込みを防ぐため、予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率40%（平年35%）

：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

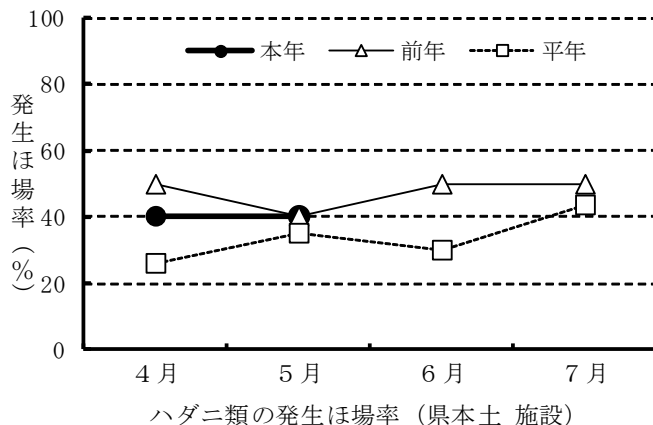
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等で

スポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

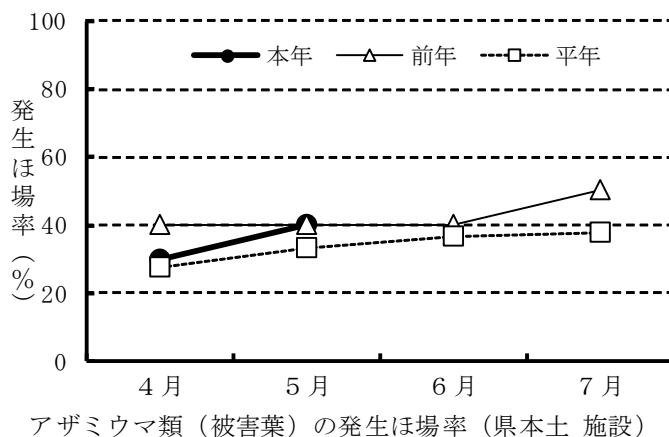
(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率40%（平年33%）

：やや高い（+）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。
- (イ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。
- (ウ) クロゲハナアザミウマは主に中下位葉に寄生しているため、薬液は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (エ) アザミウマ類はキクえそ病（TSWV）、キク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。
- (オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 (果実) やや多

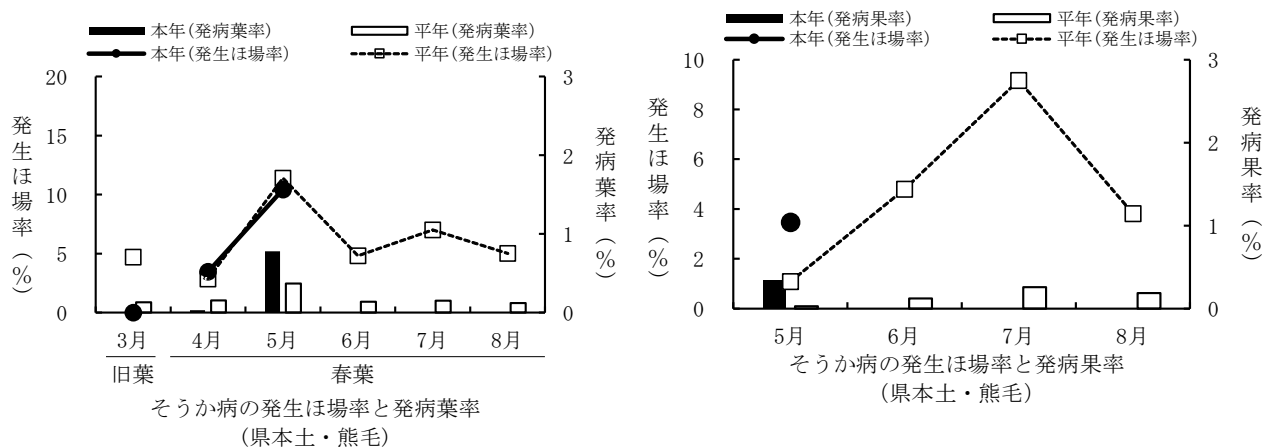
奄美地域 (果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	やや多
発生ほ場率	10% (平年 10%) : 並	3% (平年 1%) : やや高い (+)
発病率	0.8% (平年0.3%) : 高い (+)	0.3% (平年0.0%) : 高い (+)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	並
発生ほ場率	0% (平年 13%) : やや低い (-)	0% (平年 0%) : 並
発病率	0% (平年0.5%) : やや低い (-)	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉, 発病果は伝染源となるので, ほ場外に持ち出し処分する。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 並

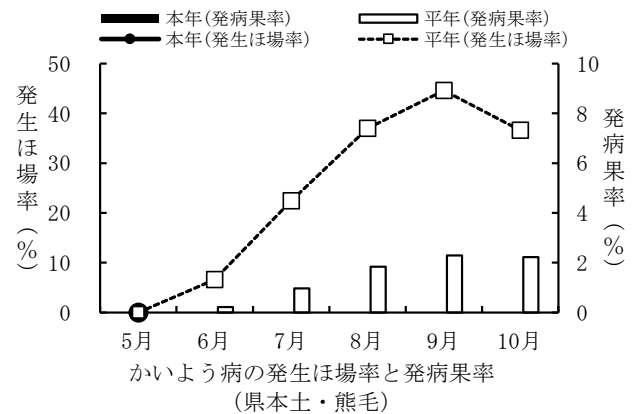
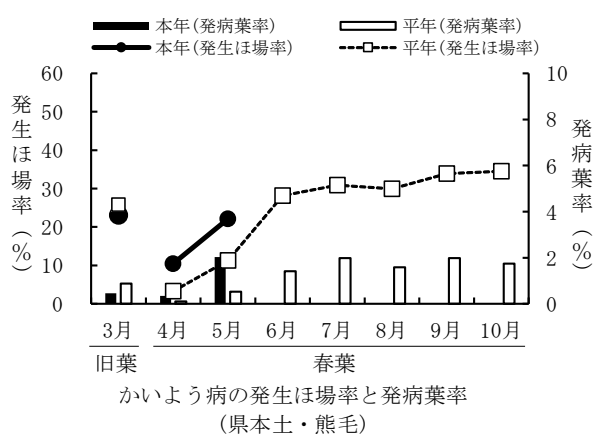
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	多	並
発生ほ場率	22% (平年 11%) : 高い (+)	0% (平年 0%) : 並
発病率	2.0% (平年 0.5%) : 高い (+)	0% (平年 0%) : 並



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	14% (平年 9%) : 並	0% (平年 0%) : 並
発病率	0.1% (平年 0.1%) : 並	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染した後では防除効果が落ちるので、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により生じた葉や果実の傷口から感染するので、防風林、防風樹の管理に努める。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
 (イ) 発生量
 県本土・熊毛地域 少
 奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

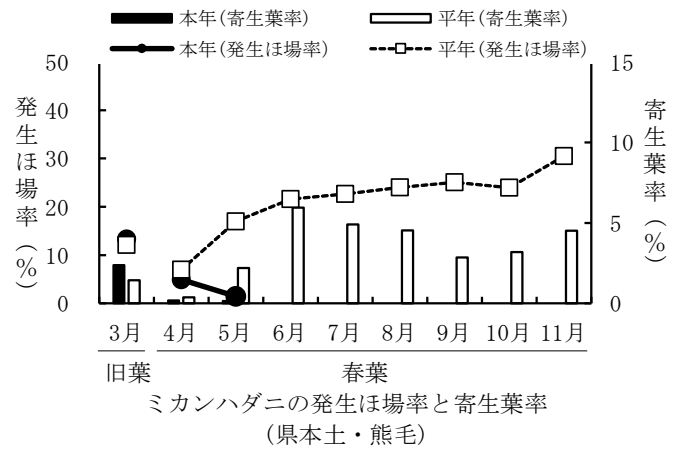
- (ア) 調査結果(春葉) 発生量：少
 発生ほ場率 1% (平年17%)
 : 低い (-)
 寄生葉率 0.2% (平年2.2%)
 : やや低い (-)

<奄美地域>

- (ア) 調査結果(春葉) 発生量：並
 発生ほ場率 0% (平年0%) : 並
 寄生葉率 0% (平年0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。
 (イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、夏期にかけてはマシン油乳剤(97%)による防除を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

- ア 本病は落花直後～梅雨期に感染が多くなる。
- イ 薬剤散布間隔は、散布からの累積降水量250～300mmを目安とする。
- ウ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

- ア 成虫は5月下旬から発生し、6月上旬～中旬が羽化最盛期になる。
- イ 産卵は6月中旬から始まり7月上旬が盛期で、8月まで続く。
- ウ 朝夕、成虫の活動がにぶい時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。
- エ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。
- オ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断（ストックカバー法）すると、成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発育ステージ別防除方法

時 期	5月 上 中 下	6月 上 中 下	7月 上 中 下	8月 上 中 下
生 態				
物理的 防除法				
生物的 防除法				
化学的 防除法				

注) 県本土の発育ステージを示す。

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率61% (平年46%)

：やや高い

1 m²当り病葉数9.4枚 (平年3.5枚)

：やや多

(イ) 気象予報

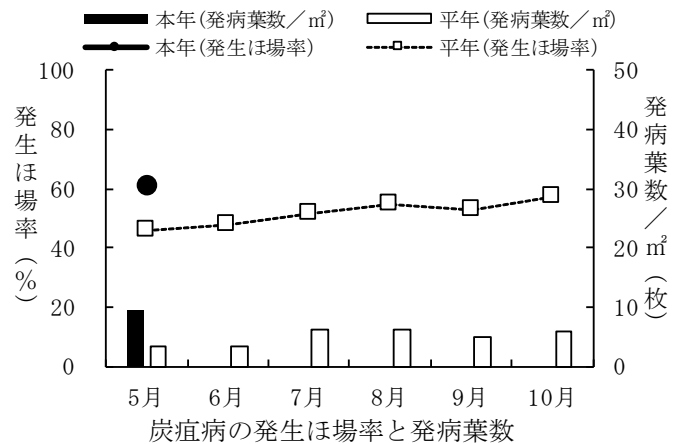
降水量：平年並か多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 多発状態の続く茶園は、二番茶後に整・剪枝（深刈り等）により伝染源を除去する。

(イ) 摘採残葉での発生に注意し、本病に弱い品種や多発ほ場では三番茶萌芽～1葉期に防除する。

(ウ) 三番茶の生育期に降雨が続き、治療効果のある薬剤を散布する場合は、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。



(2) 輪斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率16% (平年5%)：高い

1 m²当り病葉数0.7枚 (平年0.2枚)

：やや多

(イ) 気象予報

降水量：平年並か多い (+)

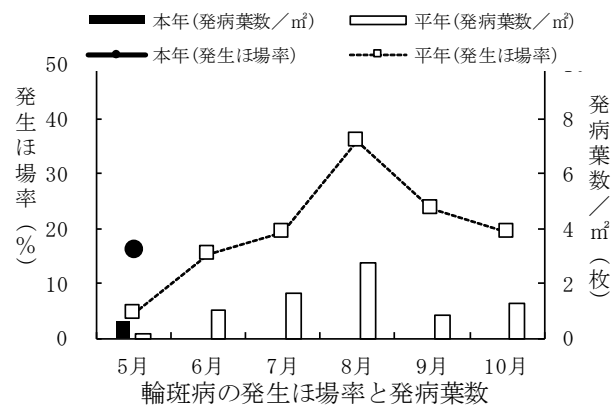
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二、三番茶の摘採期に降雨が多い場合は、摘採残葉の発病に注意する。

(イ) 防除薬剤に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に、浸透移行性の薬剤を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

(ウ) 摘採直後に防除できなかった場合は、摘採7日後までに整枝または刈番茶を摘採し、その直後に防除を行う。ただし、降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。

(エ) ストロビルリン系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。



(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域	県本土	
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ	多
	チャハマキ	やや多
(ウ) 発生時期	チャノコカクモンハマキ	早い
	チャハマキ	早い

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

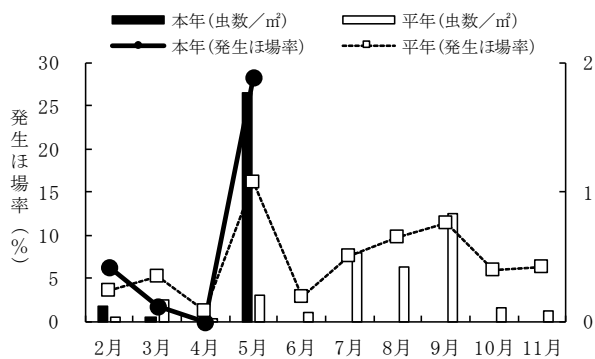
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	多	やや多
発生ほ場率	28% (平年 16%) : 高い	25% (平年 13%) : 高い
虫数 (1㎡当たり)	1.8頭 (平年 0.2頭) : 多	0.3頭 (平年 0.3頭) : 並
＜南九州市知覧町フェロモントラップ＞		
誘殺数 (3月第1半旬~5月第4半旬)	419頭 (平年 274頭) : 多 (+)	1013頭 (平年 492頭) : やや多 (+)
越冬世代の発蛾ピーク	早い	早い

ウ 防除上注意すべき事項

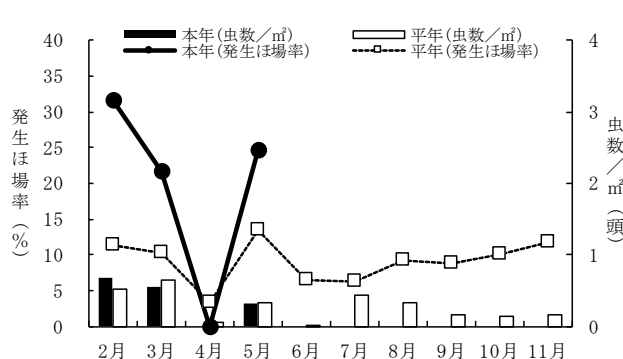
(ア) 薬剤防除を行う場合、防除適期はふ化～2齢期（発蛾最盛日の10～15日後）である。

(イ) 摘採との関係で、適期防除ができない場合は、摘採後早めに防除を行う。

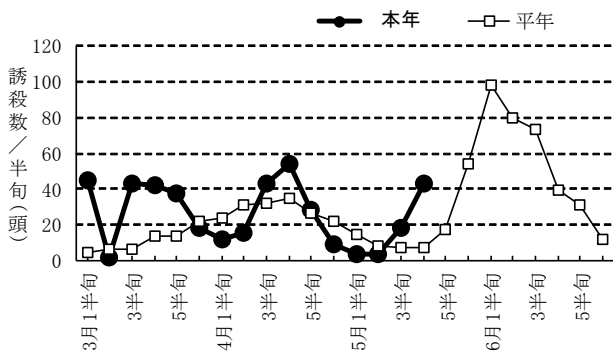
(ウ) ジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。



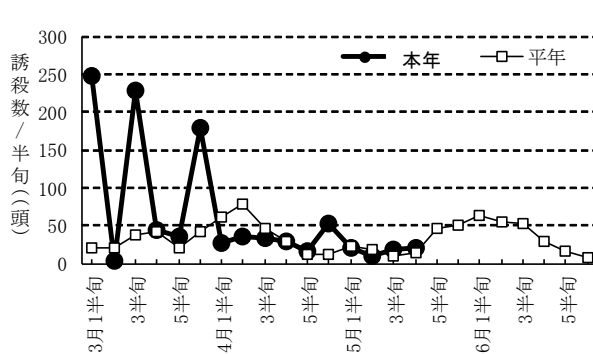
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺数 (南九州市知覧町)



チャハマキのフェロモントラップ誘殺数 (南九州市知覧町)

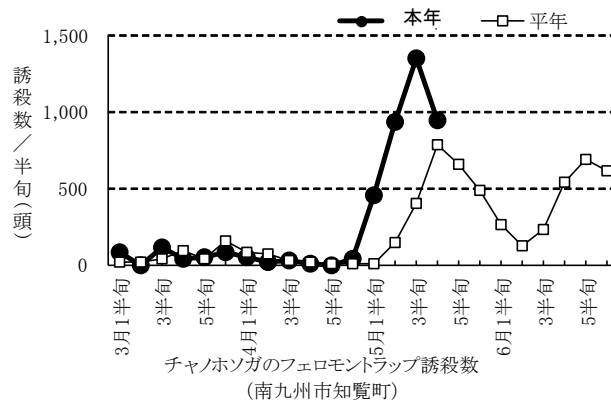
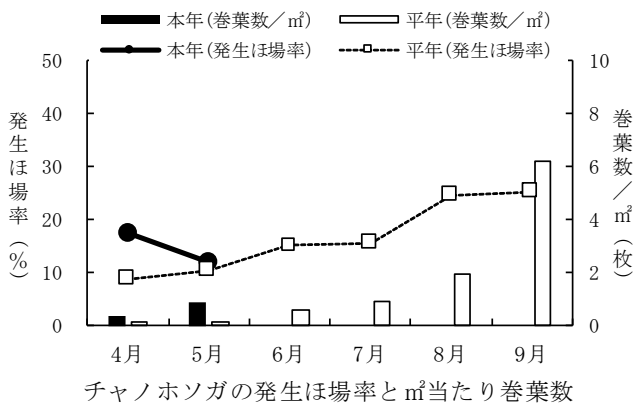
(4) チャノホソガ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多
- (ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率12%（平年10%）：並
㎡当たり巻葉数 0.9枚（平年0.1枚）：多
<南九州市知覧町フェロモントラップ>
誘殺数（3月第1半旬～5月第4半旬）4,214頭（平年1,951頭）：多（+）
第一世代の発蛾ピーク：早い



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 三番茶期の萌芽～1葉期に防除を行う。
- (イ) 萌芽～1葉期頃に葉裏への産卵や幼虫の潜葉を確認し、薬剤を散布すると効果的である。
- (ウ) 三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。
- (エ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って薬剤を選択する。

(5) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

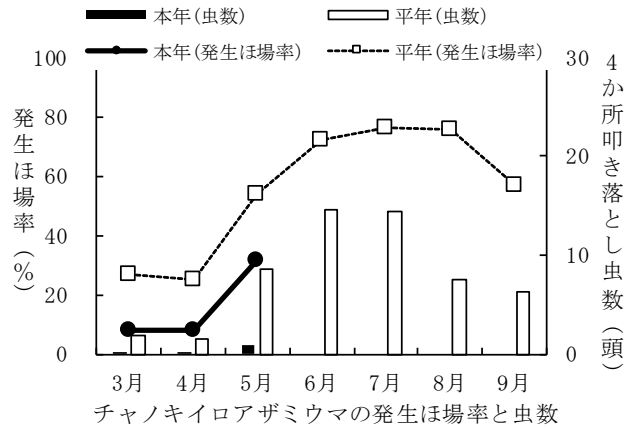
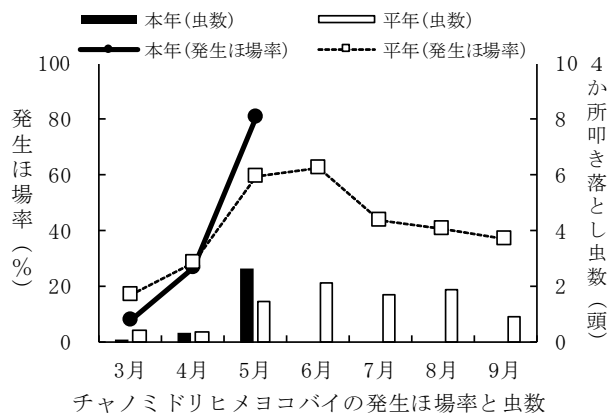
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量
チャノミドリヒメヨコバイ 多
チャノキイロアザミウマ やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	多	やや少
発生ほ場率	81% (平年 59%) : 高い	31% (平年 54%) : やや低い
虫数(4か所叩き落とし)	2.6頭(平年1.5頭) : 多い	0.9頭(平年8.5頭) : 少ない



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除する。

(イ) 発生が多い場合は、摘採後に摘採残葉や遅れ芽を加害し次茶期の発生源となるため、摘採後の防除を行う。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、てん茶、有機茶、輸出茶等栽培が多様化している。また、近年更新園が多く、更新の時期や程度により防除時期が園地により異なる。このため、薬剤を散布する際は、隣接茶園等へのドリフトがないように十分注意するとともに、摘採前日数を遵守する。また、摘採前であることを知らせる「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせる等、ドリフトが起これないよう十分に注意喚起を行う。

2. 更新園について

更新園は、芽の再生が園によって異なり生育期間が長く、萌芽～生育初期に病害虫の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病害虫対策（チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、カンザワハダニ、炭疽病、輪斑病、新梢枯死症等）は適切に行う。

3. クワシロカイガラムシ

昨年10月の発生量は平年に比べ少なかった。本年の第一世代ふ化最盛期（有効積算温度による推定値）は冬季から気温が高かったため、平年と比べ12日程度早かった。今後の防除適期である第二世代ふ化最盛期は、前年より早まることが予想されるため注意する（表）。

なお、薬剤で防除する場合は、ふ化状況を確認しふ化最盛日から5日以内に枝や幹に十分かかるように散布する。

表 有効積算温度による防除適期（第二世代ふ化最盛期）予測

地 点	ふ化最盛期		
	本年	前年	平年
枕 崎	6月25日	6月27日	7月2日
加 世 田	6月26日	6月30日	7月4日
さつま柏原	7月7日	7月13日	7月15日
溝 辺	7月13日	7月18日	7月10日
鹿 屋	6月29日	7月4日	7月8日
志 布 志	7月4日	7月7日	7月10日

注1) 予測は、アメダスの日平均気温（5月27日までは本年観測値、5月28日以降は平年値）を用いた。

2) 有効積算温度は、アメダス観測値より算出した第一世代ふ化最盛日の翌日を起算日として積算した。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用いている。